

フランスで得たもの

渥美裕子

シャルル・ド・ゴール空港は3度目だったのですがストラスブール空港は初めてでした。途中、パリーストラスブール間で空から見た多くの赤い屋根が何か私を高揚させていたのを覚えています。空港に降り立つとそこには同僚となる Dr. Sebastien Villaume がいました。「きみが Michiko だね？」長時間のフライトで疲れきった私に同僚は親切でした。その翌日もう一人の同僚 Dr. Julien Bossert が迎えに来ました。彼は「今は気候がいい時期だよ。いいときに来たね。」と笑顔で言ってくれました。彼ら自身留学経験があるので、初めての留学である私の気持ちを理解してくれていたようでした。その後彼らが私にとって、とても重要な、仕事仲間でもあり、友達になるのですが、この時すでに私は彼らを信用できるまでになっていました。

研究室に着くと多くのフランスをはじめヨーロッパ研究者が笑顔で迎えてくれました。みなそれぞれ自己紹介をしてくれました。私の担当教官となる Dr. Chantal Daniel は後からいらっしやいました。そのときの笑顔は今でも忘れられません。「コンニチハ！あなたが Michiko ね！」ダニエル先生は日本でポスドクの経験があるので日本語で少し話してくれました。それからのダニエル先生の教育者としてのすばらしさは言葉では表せないほどです。ほかの担当教官についている日本人研究者の友達も言っていましたがおそらくは、教官と学生の上に秘密を作らないことが、フランスの指導教官としての一つのポリシーでもあるかのようにでした。(もちろん、秘密があるとは思いますがそれを学生が知る必要がない場合、すばらしい気遣いで最終的にはその学生がうまく仕事ができるように、人間関係ができるように考えてくださっていました。)そこで、ゆるぎない人間関係を結ぶことができ、それが仕事に反映していくのを感じました。なかでも忘れないのは「あなたは young researcher だから何も知らないのは当然なのよ。

だからみなに聞きなさい。そして多くを吸収しなさい。しかし、あなたの研究のすべてを他人に教えてはいけないと言うことも忘れてはいけない。」といい、私にもほかの PhD 学生同様にヨーロッパ内での交換科学者制度を使えるようにしてくださいました。そのおかげで私はベルリン自由大学の Dr.Jorn Manz のもと、Dr.Leticia Gonzalez とともに研究を進めることができましたし、イタリアでの European Summerschool in Quantum Chemistry 2005 に参加して Lund 大学の Dr.Bjorn Roos や Cambridge 大学の Dr.Nick Handy はじめ、著名なヨーロッパ量子化学者と直に *discuter* したり、*suggestion* をいただいたりすることができました。また、ほかの多くのヨーロッパ研究者とも、友達にもなって、とても充実した博士課程をヨーロッパで送ることができました。

ダニエル先生は研究に対して本当に厳しかったのですがそれは愛情ある厳しさで、私の考えもよく聞いてくださったし、先生のお宅で夕飯をいただくこともしばしば、でした。もちろんそれは私だけではありませんでした。ほかの同僚たちも同じ意見でした。私の中では、ああ、これがフランスの *égalité*、*fraternité* なのだなと思いました。研究所はダニエル先生だけではなく、ほかにも多くの理論化学研究者がいらっしやっただけで、いつも多くの意見を聞くことができました。いずれの先生も、研究には厳しいけれど、それ以外では本当にやさしく接してくれました。いつも外国人である私が仲間に入れるように気遣ってくれました。

私がいた *Université Louis Pasteur/CNRS* 量子化学研究所はとても *sociable* で、朝 10 時にコーヒーの時間、夕方 4 時にお茶の時間を設け、週末の金曜日になると「今日はぼくの誕生日だから」とか、何かいいことがあるたびにケーキを買ってきてみなでお茶を飲みながらそのケーキを食べたりしました。それはとてもおいしく、フランスを選んでよかったと思える瞬間の一つでした。みな、*gourmand* でありますし、そしてみな *bavard* なのもすばらしい思い出です。すぐ、あはは、と笑います。このコーヒーとお茶の時間というのはとても貴重なものでした。なぜなら私達量子化学研究者はパソコンに向かって仕事をする時間が多いため、他人とのコミュニケーションをとる時間が必要だか

らです。

そのようなすばらしい環境の中で、やはりフランスを知るにはフランス語を使わなければならないことを実感し、間違いながらもなるべくフランス語を使うようにしました。なんでも挑戦しよう！と思っていたのでゼミ発表、フランス国内での発表ではフランス語を使うことに決めていました。その際にはフランス人同僚の手助けは必至であったし、彼らが私のために時間を割いてくれたこと、そしてともに原案を書いてくれたことは忘れられません。

また、いつも心にとめていたのは、坂井光夫先生にパリで何度かお会いしたときに「渥美さん、勉強だけじゃだめだ。フランスの *esprit* を吸収しなさい。」と言われたことです。何かを同僚に頼むときも、先生と *discuter* するときも日本とちがいで、どんどん自分から意見を言って、時に *Non !* ということ、発表に対しての *defense* の気持ち、などを実際に感じ取ることができました。時に美術館に行き、オペラに観に行き、フランス国内を旅行し、“フランス”の一部を感じられることは本当に幸せでした。

また量子化学の学び方も、ヨーロッパと日本では違うので、DEA (DEA の制度は昨年度で廃止になってしまいましたが) の授業に出席したり、同僚たちに教わりながら、楽しく学ぶことができました。ヨーロッパでは HF と DFT の比較を行ったりしました。研究するって本当に楽しいんだなと思いました。

フランスでは、よい人間関係がよい仕事を作り出す、助け合うが仕事の秘密はしっかり守る、自分の意見をはっきりと言う、効率よく仕事を進める、仕事への集中力、休みはしっかりとる、など自分がもっと前へ進んでいくために重要だと思われることを学びました。そして何よりも、同僚たちと歩いていても「フランスでは女性が前を歩くんだよ。」と言われ、女性がより多くの可能性を勝ち取れることができるこの習慣に感銘を受けました。

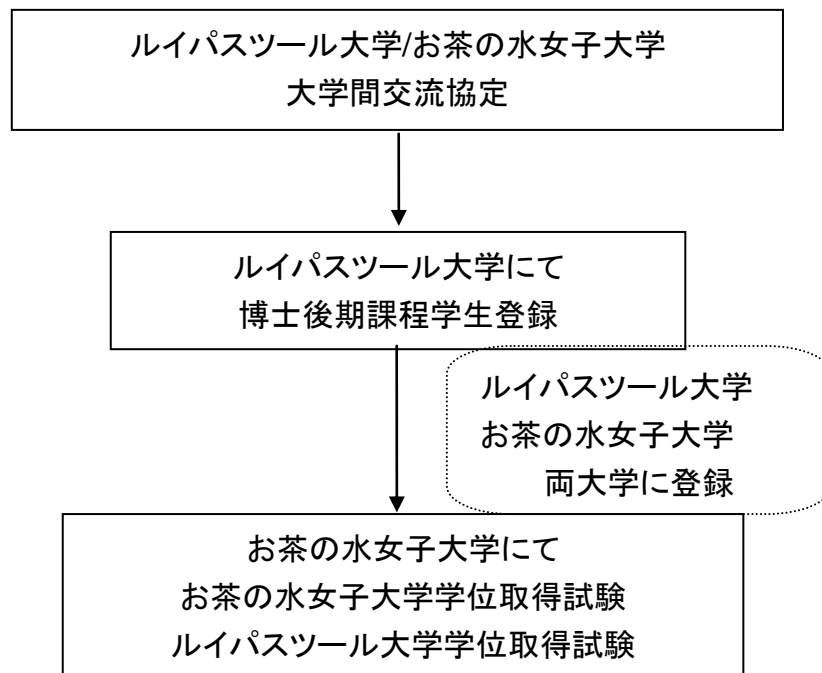
このようなすばらしい体験が出来ただけでなく、日仏両国から学位を頂戴することができたのは決して私ひとりの力ではないと痛感しています。多くの先生方、同僚、

友人、家族の支えがあって PhD が取得できました。この学位の重みをしっかりと受け止め、今後も日本・フランスの役に立てるようがんばりたいと思っています。

最後に日仏理工科会のご支援、また湯浅年子記念特別研究員、そして 2004-5 フランス政府給費生として機会を与えてくださった先生方、ストラスブールでは中谷陽一先生、圭子先生はじめ多くの研究者の方々のご協力なしにはこのような成果は得られなかったと実感しております。この場をお借りして深く感謝いたします。

2006 年 4 月

以下、フランスと日本の両方から学位をいただいた経過を図に表します。



Dr.Chantal Daniel と。お茶大にて。